

8月13日 テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 1章1～10節

説教題：「待ち望む希望」

今日の聖書個所で示されているように、私たちは「イエス様が再臨する」という希望を持っていて、その再臨が起きた時には救われるべき人間と裁かれるべき人間が分けられることになると思っています。ただ、この現代を生きる私たちは、普段の生活の中でそのことをあまり意識していないかもしれません。未来はいつまでも続くと思っているのではないのでしょうか。環境問題なんかはその代表例で、「この世界が今後100年後も、1000年後も続く」と思っているからこそ、「地球の環境を守ろう」と考えているのだと思います。

これが、「来年イエス様の再臨が起きます」「来月末で終末が始まります」「明日世界が終わります」なんて言われた場合、私たちはどうするのでしょうか。その先の未来を考える必要がなくなることになりますから、多く人は「悪い意味で好き放題」の生活を送ってしまうのではないのでしょうか。今日の聖書個所ではその信仰を褒められているテサロニケの信徒たちも、この後の手紙Ⅱの方で「世の終わりが間近に迫っている」ということを間違った形で受け止め、怠惰のうちに日々を過ごし、「もう働く必要はない」という結論に至ってしまった人が多くなってしまったことを指摘されています。

パウロは彼らを教会の交わりから遠ざけるように勧めました。自分で働かず、パンを貰って生活しようとする人々をと交わらないようにすることで「怠惰なものが自分の生活を恥じるようにさせなさい」と勧めています。そうでなければ、突然審きのときが来た場合、怠惰に過ごしていた人は救いではなく滅びの運命が待っています。その人への愛のために、甘やかすのではなく厳しく教えるようにと、それがその人にとっての愛の行いであるとパウロは語っています。

そのように、再臨の時が「突然来る」ということも、とても重要なことでありました。例えば、イエス様は再臨について、今日の裏面の下部分に記載している個所のマタイによる福音書24章では、「ノアの時代の大洪水のように突然訪れる」と言っています。

いつこの世界が終わるのか、私たちには分かりません。だからこそ、「明日世界が終わるかもしれない」と思いながら、今日一日を過ごすことが大事なのだと思います。今日、友人と喧嘩をして、明日世界が終われば、仲直りをすることなく永遠の別れを経験することになります。今日罪を犯して、悔い改めることなく眠りにつけば、起きたその時には目の前に神様がいて、永遠の滅びを言い渡されるかもしれないのです。

ただ、私たちはその時を怖がる必要はありません。その時が来れば、今私たちが神様を賛美し、神様を礼拝するこの小さな群れでいる私たちが、イエス様の再臨によって「すべての人が神様を賛美する」栄光の群れへと変えられるのです。その喜ばしい希望があるからこそ、私たちは終わりの時を、怯えながらではなく喜びをもって待ち続けることが出来るのです。

希望の光によって照らされて、神様の愛の中で生かされる。その新しい命が与えられるときが来るその時を、共に楽しみに待ち続けましょう。私たちが生きている時に来ないかもしれない、しかし明日にでも来るかもしれない、その時まで、この喜びの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 1章1～10節

- 1:パウロ、シルワノ、テモテから、父である神と主イエス・キリストとに結ばれているテサロニケの教会へ。恵みと平和が、あなたがたにあるように。わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のことをいつも神に感謝しています。あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。神に愛されている兄弟たち、あなたがたが神から選ばれたことを、わたしたちは知っています。わたしたちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と、聖霊と、強い確信とによったからです。わたしたちがあなたがたのところで、どのようにあなたがたのために働いたかは、御承知のとおりです。そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。主の言葉があなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡ったばかりでなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられているので、何も付け加えて言う必要はないほどです。彼ら自身がわたしたちについて言い広めているからです。すなわち、わたしたちがあなたがたのところでどのように迎えられたか、また、あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、更にまた、どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。

マタイによる福音書 24章36～44節

- 36:「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲って来て一人残らずさらうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。……だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」